

# 「ボスニア語」の形成

齋藤 厚

## はじめに

本稿は、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国(以下では第二次世界大戦後に建国された同国を旧ユーゴと省略する。なお、旧ユーゴの解体に伴い、セルビアとモンテネグロが創設したユーゴスラヴィア連邦共和国は新ユーゴとする。)から分離・独立した共和国ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、現在、セルビア語 *srpski jezik*、クロアチア語 *hrvatski jezik* と並び公用語とされている、「ボスニア語 *bosanski jezik*」に関するものである。「ボスニア語」は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが旧ユーゴからの独立を宣言し民族紛争に突入していった1992年春の時点においては、公用語としてはおろか、少数民族言語としても公式には存在していなかった。1990年頃より「ボスニア語」に関する記事や書籍が増え始める中、同言語が公式に存在を開始するのは紛争最中の1994年春である。「ボスニア語」を母語たるものとしたのは「ボシュニャク人 *Bošnjaci*」であり<sup>①</sup>、旧ユーゴ時代に民族としての存在を承認されたムスリム人 *Muslimani* が、自己の民族名を変更したものであった。なお、「ボシュニャク人」は、ムスリム人としてはセルビア・クロアチア語 *srpskohrvatski jezik* を母語としていた。ムスリム人は、1994年春、セルビア人と並ぶ紛争相手であったクロアチア人との間で、同盟の結成およびボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦の樹立に合意した際に、合意文書たる同連邦憲法草案に「ボシュニャク人」、「ボスニア語」を明記して、この民族名と言語名の使用を開始した<sup>②</sup>。当時、「ボスニア語」に関する文法書や正書法辞典は存在しておらず、語彙に関する辞書が僅かに出版されていたに過ぎなかった<sup>③</sup>。それゆえ、この新言語がいかなるものであるのかは、多分に不明であった。

1995年年末に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争の当事者が和平に合意し、和平協定の調印によって紛争が一応の終息を見ると、「ボシュニャク人」の支配権が確定した領域においては、「ボスニア語」による学校教育が本格的に開始された。さらに、翌年秋には、『ボスニア語正書法辞典』 *Pravopis bosanskoga jezika* が、同言語が公式に存在を開始して2年以上経過した後に、漸く出版された<sup>④</sup>。こうした経緯にも拘わらず、「ボスニア語」には依然不明である点が少なくない。その第一は、「ボスニア語」が、独立言語たりうるのか、それともセルビア・クロアチア語に加わった新呼称の域を出るものではないのか、未だはっきりとしていないことである。「ボスニア語」は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、セルビ

1 Bošnjaciの訳語は、「ボスニア人」とするのが通例となっているが(例えば、柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店、1996年、26頁。)、この他にも「ボスニア人」と訳される単語 *Bosanci* が存在するため、本稿では便宜上、「ボシュニャク人」と記すことにする。

2 *Ustav Federacije Bosne i Hercegovine, I. Uspostavljanje Federacije, Član 6.*

3 *Alija Isaković, Rječnik karakteristične leksike u bosanskome jeziku* (Sarajevo: Svjetlost, 1992).

4 *Senahid Halilović, Pravopis bosanskoga jezika* (Sarajevo: Preporod, 1996).

ア語ともクロアチア語とも異なる言語としての扱いを受けている。しかし、その語彙、文法、正書法は、ムスリム人の母語であったセルビア・クロアチア語と、ほぼ、あるいは全く同一である<sup>5)</sup>。また、第二は、民族とその母語たる言語の名称に関わる問題である。何故、ムスリム人は自民族名を「ボシュニャク人」に変更するに際し、「ボスニア語」との母語名を選択したのであろうか。換言すれば、何故、言語名が「ボシュニャク人」に対応すべき「ボシュニャク語 *bošnjački jezik*」でないのか。あるいは、何故、民族名が「ボスニア語」に対応すべき「ボスニア人 *Bosanci*」でないのか。

「ボスニア語」を巡るこれらの問題に関しては、筆者が知りうる限り、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは勿論のこと、旧ユーゴ地域その他共和国においても多くの議論は為されていない。旧ユーゴ下で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナと公用語を共有してきたセルビア、クロアチアにおいては、旧ユーゴ解体以降のセルビア語とクロアチア語の関係や、両言語と民族意識との関係等に関する研究が進んでいるが、それらの中で、「ボスニア語」にまで議論が及んでいるものは少ない<sup>6)</sup>。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの「ボシュニャク人」支配地域においては、紛争終結以降、「ボスニア語」に関する書籍が少なからず刊行されているものの、言語的独自性や伝統性の主張に終始せず、同言語の客観的分析を試みたものとなると皆無に等しい。以上を鑑みて、本稿では、まず、「ボスニア語」と不可分の関係にあると思われる、ボスニア・ヘルツェゴヴィナで使用されてきたセルビア・クロアチア語の特徴を浮き彫りにする(第1章)。続いて、旧ユーゴ解体までの近現代における、「ボスニア語」を巡る諸主張や、実際に遂行された政策を提示する(第2章)。「ボスニア語」は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナがハプスブルク帝国の委託統治下にあった時代に、短期間ではあるが公用語とされたことがあり、当時の同言語を巡る政策と言語の特徴とは是非明らかにする必要があろう。その上で、旧ユーゴ解体以降の、ムスリム人の民族意識および母語に対する意識の変化を論じ、「ボシュニャク人」となった彼らの新母語たる「ボスニア語」が、それまでのセルビア・クロアチア語と具体的にどう異なるのか、また、それら刷新された部分がいかに使用に移さ

5 「ボスニア語」が独立言語たりうるか否か、という、この第一の問題提起を巡っては、独立言語たりうるための規準の問題や、独立言語の是非を判断すること自体が内包する問題などが浮上してこよう。まず、前者であるが、規準については、言語的、政治的、その他種々の規準が存在しよう。例えば、「かつて一言語として扱われたセルビア・クロアチア語は、旧ユーゴの解体により、(セルビア語とクロアチア語の)二言語とみなされるようになった」(伊東孝之、直野敦、萩原直、南塚信吾監修『東欧を知る事典』平凡社、1993年、245頁、項目「セルビアクロアチア語」)のであり(下線部は筆者)、ここで規準が置かれているのは、文面の限りでは、旧ユーゴの解体、という政治環境である。ちなみに本稿では、主として言語的な規準から「ボスニア語」に関する考察を進めていく。また、後者に関し、「ボシュニャク人」はムスリム人時代に、固有言語の欠如から、その民族性を他民族にしばし否定されてきており、「ボスニア語」が独立言語たりうるか否かの判断は、ともすれば「ボシュニャク人」の民族性否定につながりかねない危険を有する。筆者は、この問題の存在を承知の上で、第一の問題提起を行っており、言語から民族性の是非を判断する立場は取っていないことを明記しておく。

6 これらのテーマを論じたものとして、セルビア(新ユーゴ)では、Ranko Bugarskiの *Jezik od mira do rata* (Beograd: XX vek, 1995)や *Jezik u društvenoj krizi* (Beograd: XX vek, 1996)などが、また、クロアチアでは、Orlanda Obad, “Nema dogovora oko hrvatskoga jezika,” *Jutarnji List*, 9 October 1999, pp. 25-27. などがある。なお、この両国外では、「ボスニア語」をも含めて論じたものとして、Daria Sito Susic, “The Fragmentation of Serbo-Croatian Into Three New Languages,” *Transition* 2:24 (1996), pp. 10-13. がある他、最近発表された邦語による研究として、三谷恵子「ユーゴ連邦崩壊後の言語状況—セルビア・クロアチア語圏を中心に—」『現代文芸研究のフロンティア (I)』スラブ研究センター報告シリーズ第70号、2000年、134-145頁、がある。

れているのかを検証していく(第3章)。本稿が扱う「ボスニア語」の事例は、言語ではなく宗教を基盤としてきた民族による、民族意識の変化に伴う固有言語形成の試み、という稀有な事例であり<sup>7)</sup>、民族と言語の関係を考える上で興味深い素材であると思われる。

## 1. ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるセルビア・クロアチア語

### (1) セルビア・クロアチア語の諸特徴

セルビア・クロアチア語は、旧ユーゴにおいて、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人、モンテネグロ人が母語としてきた言語で、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロの各共和国において公用語として使用されてきた。このように、一言語が複数民族により共有されてきた事例は、他のスラヴ諸言語にはない<sup>8)</sup>。セルビア・クロアチア語内部の相違はそれなりに大きく、方言的には、疑問代名詞「何」に用いる単語の相違によって、シュト方言 *štokavski*、カイ方言 *kajkavski*、チャ方言 *čakavski* の三方言に分類される。これらの中で、言語人口が圧倒的に多いのはシュト方言である。というのも、カイ方言はクロアチアの北西部で、チャ方言は同じくクロアチアの沿岸地方の一部(イストリア半島および島峡部)でしか話されないからである。シュト方言は、一部地域でイェと発音される母音が、他地域ではエまたはイとなるのに基づいて、イェ方言 *ijekavski*、エ方言 *ekavski*、イ方言 *ikavski* の三下位方言に分類される<sup>9)</sup>。これらの中では、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの中南部からクロアチアの沿岸地方にかけて話されるイ方言が、言語人口が比較的少ない。一方、エ方言はセルビアの大部分で、また、イェ方言は残りの地域全域で話されており、実際、セルビア・クロアチア語の標準化も、両方言を軸として進展してきた<sup>10)</sup>。

複数民族がセルビア・クロアチア語を共有する基盤は、第一次世界大戦後の南スラヴ人連合国家建国に先立ち、19世紀を通じ形成された。19世紀前半、セルビアの言語学者ヴーク・カラジッチは、新シュト方言(シュト方言を、複数形の格変化およびアクセントの特徴により新旧に分類したものの一方)を基体とし、発音通りの表記を原則とする音声式正書法を採

7 旧ソ連に代表される社会主義連邦国家や、第二次世界大戦後に独立した旧植民地国家の多くにおいては、民族と言語(国家語/民族語)が同時に形成されるのが一般的であった。それゆえ、言語ではなく宗教を基盤として形成されたムスリム人のケースは、しばし「特殊ボスニア的」と見なされてきた。柴宜弘「ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム問題」『ソ連東欧地域の史的研究』早稲田大学社会科学研究所、1986年、183頁。なお、「ボスニア語」の事例と何らかの共通性を持つものとしては、宗教による国家の分裂が、言語的な分岐に拍車をかけたヒンディー語とウルドゥー語の事例や、宗教を基盤としてきたユダヤ人が、イスラエル建国に当たって近代ヘブライ語を公用語として採用、形成した事例等が挙げられよう。フロリアン・クルマス著、山下公子訳『言語と国家』岩波書店、1987年、93頁。

8 Branislav Brborić, “Predistorija i sociolingvistički aspekti,” Milorad Radovanović et al., *Srpski jezik na kraju veka* (Beograd: Institut za Srpski Jezik SANU, 1996), p.17.

9 これらの母音は、しばし *jat'* と呼ばれる共通スラヴ語の *ja* に起源を有しており、互いの対応の原則は次の通りである。

イェ方言における *ije* : エ方言 → *e* (長母音 *ē*)、イ方言 → *i* (長母音 *i*)

イェ方言における *je* : エ方言 → *e* (短母音 *e*)、イ方言 → *i* (短母音 *i*)

Wayles Browne, “Serbo-Croat,” in Bernard Comrie and Greville G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages* (London: Routledge, 1993), pp.308-310; 三谷恵子「現在のクロアチア語について」『スラヴ研究』第40号、1993年、77頁。

10 Browne, “Serbo-Croat,” pp.382-385.

用する形で言語改革を実施した。この改革の成果は、19世紀後半に、まずセルビアで、続いてクロアチアで大幅に取り入れられ、使用されるようになった。もっとも、セルビア人とクロアチア人は(第二次世界大戦後まで、ムスリム人とモンテネグロ人は民族としては未承認)、完全に統一された標準語は形成しなかった。両民族は、共通の正書法と文法体系を使用するようになる中で、おのおのの発音、語彙、文法上の特徴を反映させた、部分的に異なる形式を形成していった。これらの形式は、南スラヴ人連合国家の建国に伴い、両民族が公式に言語を共有するようになって以降も存続した。さらに、旧ユーゴ下でも、単一の標準語形成は模索されず、セルビア・クロアチア語は、複数の標準形を有する言語として存在し続ける。

こうしたセルビア・クロアチア語の標準形は、西部標準形変異体 *zapadna standardnojezička varijanta* と東部標準形変異体 *istočna standardnojezička varijanta* の二標準形変異体に分類するのが一般的である。前者はイエ方言に基づくもので、個別に見た場合のクロアチア語である。また、後者はエ方言に基づくもので、個別に見た場合のセルビア語である。加えて、セルビア・クロアチア語には、標準形に準ずるものとして、標準的表現というカテゴリーが設けられる場合が多い。ここに分類されるのは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現 *bosanskohercegovački standardnojezički izraz* とモンテネグロ標準的表現 *crnogorski standardnojezički izraz* の二者である。両標準的表現は、共にイエ方言に基づいており、前者が両標準形変異体の混合的性格を有するのに対し、後者は東部標準形変異体と特徴をほぼ同一にする<sup>(1)</sup>。以下では、西部標準形変異体と東部標準形変異体の特徴を明らかにすべく、両者間のイエ方言、エ方言以外の主要な相違点を提示してみる。

#### 1. 文字

- ・ラテン文字(西)－キリル文字(東)

(以下、西部標準形変異体を西、東部標準形変異体を東と記す。なお、東の側にはラテン文字が相当浸透している。)

#### 2. 正書法

- ・未来時称の短縮形に関する表記法

例：Vidjet ću. (西)－Videću. (東) (見てみるよ。)

#### 3. 文法

- ・助動詞と組む本動詞の活用

助動詞＋不定形(西)－助動詞＋接続詞 da＋活用形(東)

例：Moram ići. (西)－Moram da idem. (東) (私は行かなければならない。)

#### 4. 語彙

- (1) 語彙の一部母音または子音の相違。

例：jugoslavenski (西)－jugoslovenski (東) (ユーゴスラヴィアの)

točno (西)－tačno (東) (正確な、正しい)

opći (西)－opšti (東) (一般的な、普遍的な、共通の)

11 Dževad A. Jahić, *Jezik, nacija, nacionalizam: ogledi o jeziku u nacionalnom i društvenom kontekstu* (Sarajevo: Oslobođenje, 1990), pp.64-65.

također (西) — takođe (東) (～もまた)

utjecaj (西) — uticaj (東) (影響)

(2)接頭辞または接尾辞の相違。

例：identificirati (西) — identifikovati (東) ((自己) 認識する)

formulirati (西) — formulisati (東) (形成する)

suvremen (西) — savremen (東) (現代の、同時代の)

obrana (西) — odbrana (東) (防衛、守り)

profesorica (西) — profesorka (東) ((女性の) 教授、先生)

(3)語彙自体の相違

例：povijest / historija (西) — istorija (東) (歴史)

inozemstvo (西) — inostranstvo (東) (海外、外国)

znanost (西) — nauka (東) (科学)

zrak (西) — vazduh (東) (空、空気)

val (西) — talas (東) (波、波長) (12)

両標準形変異体間に、これら以外に目立った相違はない。語彙面での相違も、全語彙に占める比率からすれば3%から7%といった程度である<sup>(13)</sup>。

さて、以上の議論で、セルビア・クロアチア語の全体像がある程度明らかになったかと思われるので、次に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける同言語を詳しく見ていくことにしよう。

## (2) ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるセルビア・クロアチア語

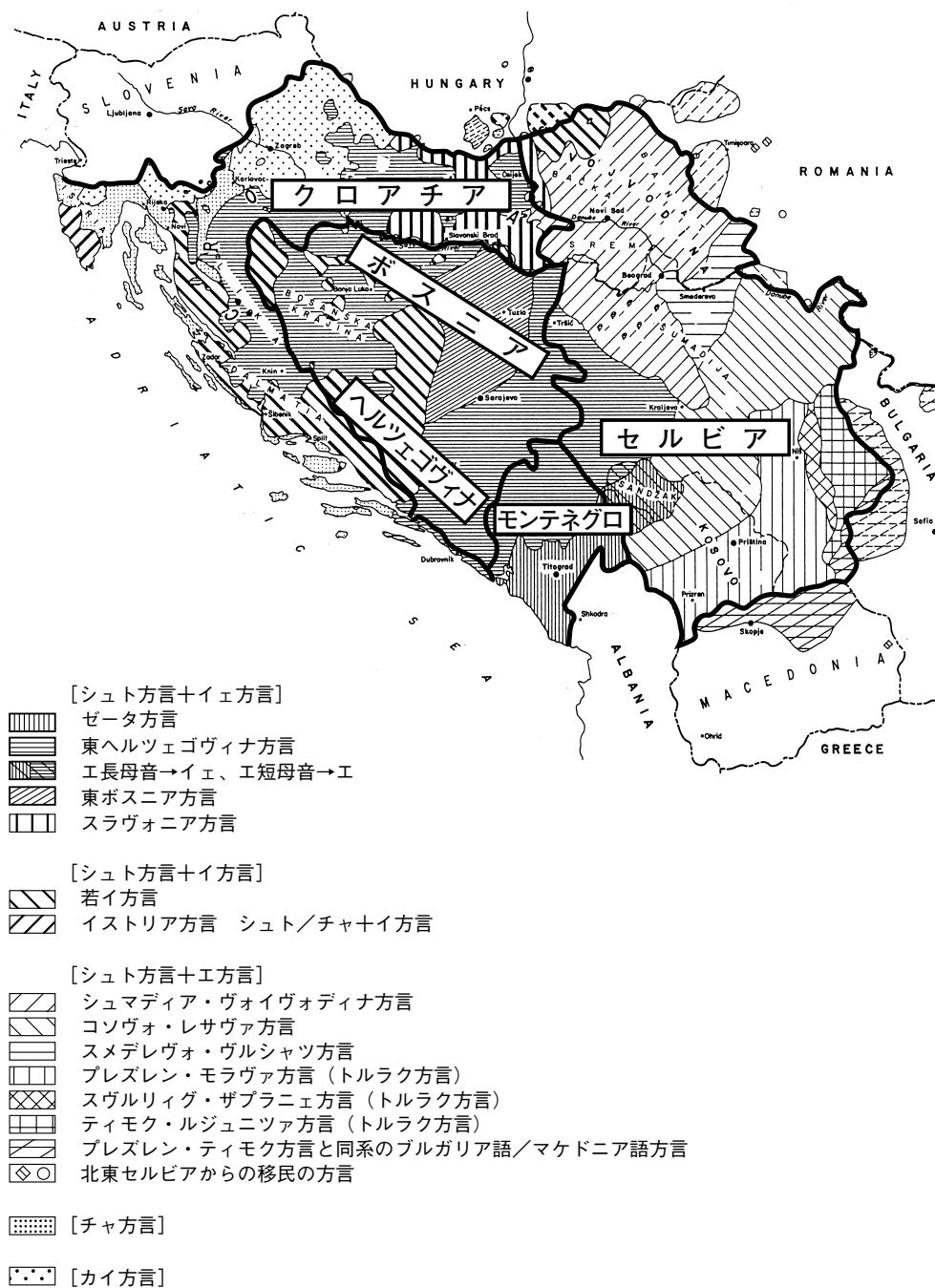
セルビア・クロアチア語が使用されてきた、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ以外の旧ユーゴの諸共和国では、諸民族が地域毎にかなり偏在しているため、方言から話者の出身地域と出身民族とを類推することがある程度可能である。これに対し、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、セルビア・クロアチア語が地域的に変容する一方で、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人は地域的に偏在せず混住してきており、方言から話者の出身民族を識別することは極めて難しい。また、例えば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ西部に居住するセルビア人の方言は、西部標準形変異体により近いし、逆に、同東部に居住するクロアチア人の方言は、東部標準形変異体により近い。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナで使用される方言は、シュト方言の、先述した新旧およびイェ、エ、イの発音の相違等を踏まえたより詳細な分類によれば、東ヘルツェゴヴィナ方言 istočnohercegovački dijalekt、東ボスニア方言 istočnobosanski dijalekt、若い方言 mlađi ikavski dijalekt の三方言である (図1)。これらのうち、東ヘルツェゴヴィナ方言は、セル

12 Morton Benson, *Serbo-croatian-English Dictionary*, 3rd ed.(Cambridge: Cambridge University Press, 1990), pp.XXV -XXVII; 三谷「現在のクロアチア語について」76-79頁。なお、(3)の znanost - nauka に関しては、nauka は西部標準形変異体においても広範に使用されるが、他方、znanost は東部標準形変異体では使用されない。

13 Senahid Halilović, *Bosanski jezik* (Sarajevo: Biblioteka Ključanin, 1991), p.52.

図1 セルビア・クロアチア語の方言分布



(出典) Wayles Browne, "Serbo-Croat," Bernard Comrie and Greville G. Corbett, eds., *The Slavonic Languages* (London: Routledge, 1993), p.383.

ビア・クロアチア語標準形の基体ともなっているもので、「何」をシュトと発音しイエ方言の一角を為す。また、東ボスニア方言は、イエ方言に属し、「何」をシュチャšćaと発音する特徴を有する。若イ方言は、その名称通りイ方言に属し、「何」の発音はシュトである。これら三方言は、東ボスニア方言に一部残存する古いアクセントを例外としていずれも新シュト方言に属し、方言間の相違も小さい。各方言には、セルビアやクロアチアの一部方言に見られるような、文法面での変化もない<sup>(14)</sup>。

このように、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、言語的あるいは方言的同質性が比較的高いのであるが、それらに基づいて地域固有の標準形を形成しようとする自発的な動きは現れなかった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、旧ユーゴ時代、その標準的表現の標準形変異体への昇格を求める主張が為されることがあった。しかし、この主張に伴って、固有の標準形形成が着手されることはなかった<sup>(15)</sup>。しかも、それ以前の問題として、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現においては、両標準形変異体間で異なる語彙、文法、正書法に関し、双方が併用され常に一方が使用される訳ではない中で、一方の用法への確定さえ試みられることがなかった。この、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現における両標準形変異体の併用に関しては、いずれもムスリム人である(あった?) プリヴァトラ、イマモヴィッチ、マフムトチェハイッチによる共著『ムスリム人とボシュニャク主義』Atif Purivatra, Mustafa Imamović, Rusmir Mahmutćehajić, *Muslimani i Bošnjaštvo* (Sarajevo: Muslimanska Biblioteka, 1991)を例にとり、前節での議論に照らし合わせつつ実際に見てみよう(表1)。なお、ここでの同書の選択は、それが筆者が入手した諸資料の中で、両標準形変異体の併用に関する個人差が最も明瞭に表れているものであったことによる。

表1 『ムスリム人とボシュニャク主義』における、著者別の両標準形変異体併用状況

|            | 西部標準形          | 東部標準形          | プリヴァトラ |    | イマモヴィッチ |   | マフムトチェハイッチ |   |
|------------|----------------|----------------|--------|----|---------|---|------------|---|
|            |                |                | 西      | 東  | 西       | 東 | 西          | 東 |
| 未来時称の短縮形   | 二語             | 一語             | 0      | 3  | 0       | 0 | 1          | 1 |
| 助動詞と組む本動詞  | 不定形            | da + 活用形       | 5      | 2  | 3       | 6 | 26         | 0 |
| 語彙の一部音節の相違 | jugoslavenski  | jugoslovenski  | 1      | 12 | 15      | 0 | 2          | 0 |
|            | točno          | tačno          | 0      | 1  | 0       | 5 | 0          | 0 |
|            | opći           | opšti          | 1      | 4  | 6       | 6 | 9          | 0 |
|            | također        | takođe         | 0      | 0  | 1       | 0 | 5          | 0 |
|            | utjecaj        | uticaj         | 1      | 4  | 0       | 5 | 4          | 0 |
| 接頭辞・接尾辞の相違 | identificirati | identifikovati | 0      | 2  | 3       | 0 | 0          | 0 |
|            | formulirati    | formulisati    | 0      | 1  | 2       | 0 | 0          | 0 |
|            | suvremen       | savremen       | 0      | 1  | 2       | 5 | 2          | 0 |
|            | obrana         | odbrana        | 0      | 1  | 0       | 1 | 4          | 0 |
| 語彙自体の相違    | povijest       | istorija       | 0      | 19 | 22      | 0 | 47         | 0 |
|            | historija      |                | 0      |    | 19      |   | 15         |   |
|            | znanost        | nauka          | 1      | 2  | 0       | 8 | 13         | 0 |

(出典) Atif Purivatra, Mustafa Imamović, Rusmir Mahmutćehajić, *Muslimani i Bošnjaštvo* (Sarajevo: Muslimanska Biblioteka, 1991)より作成。なお、語彙に関しては派生語も含む。

14 Browne, "Serbo-Croat," pp.385-386.

15 Jahić, *Jezik, nacija, nacionalizam*, p.65.

イエ方言、ラテン文字で記述される同書において、第一部を担当するプリアトラが用いる語彙と正書法は、概ね東部標準形変異体に近い。語彙面では、いずれも東部標準形変異体のものである *jugoslovenski*, *tačno*, *opšti*, *uticaj*, *identifikovati*, *formulisati*, *savremen*, *odbrana*, *istorija* が主に、あるいは専ら使用され、正書法でも、未来時称の短縮形は一語で記されている。なお、文法面で、助動詞と組む本動詞は不定形が使用されることが多く、この部分に西部標準形変異体の特徴を見ることができる。続く、イマモヴィッチによる第二部では、両標準形変異体の語彙と文法がほぼ半々に用いられる。東部標準形変異体が主に、あるいは専ら使用されるのは、語彙面では *tačno*, *uticaj*, *savremen*, *odbrana*, *nauka* で、文法面では助動詞と組む本動詞の活用形である。また、西部標準形変異体が使用されるのは、語彙面での *jugoslavenski*, *također*, *identificirati*, *formulirati*, *povijest* / *historija* である。なお、語彙 *opći* - *opšti* においては、両標準形変異体が文字通り併用されている。第三部で、マフムトチェハイッチが用いる語彙と文法は、概ね西部標準形変異体に近い。語彙面ではいずれも西部標準形変異体のものである *jugoslavenski*, *opći*, *također*, *utjecaj*, *suvremen*, *odbrana*, *povijest* / *historija*, *znanost* が使用され、文法面でも、助動詞と組む本動詞は専ら不定形が使用されている。なお、正書法に関し、未来時称の短縮形は、一語での表記と二語での表記が半々であり、この部分に限って東部標準形変異体の使用が見られる。

以上に見られる如く、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現には、両標準形変異体の併用に関する原則や規則といったものはない。語彙、文法、正書法の選択は、同標準的表現の使用者次第であり、筆者が知りうる限りでは、それらの語彙中で一方の用法が完全に定着しているものはない。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、方言レベル、口語レベルでトルコ語起源の単語 (*Turcizmi*) が多々使用されるが、それらは標準的表現からは排除されている<sup>16)</sup>。こうした言語状況にあるにも拘わらず、近現代のボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、「ボスニア語」を巡る諸主張が為され政策が遂行されてきている。では、これらの諸主張や政策の内容はいかなるものだったのであろうか。そして、その際の、「ボスニア語」の言語的規準とは一体何だったのであろうか。

## 2. 近現代における「ボスニア語」を巡る諸議論と政策

### (1) ハプスブルク帝国における「ボスニア語」を巡る言語政策

ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、「ボスニア語」を公用語とする政策が試みられた時期は、名目上はオスマン帝国領であった同地が、ハプスブルク帝国に委託統治された時期(1878-1908年)とほぼ重なる。ハプスブルク帝国は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの統治を開始して間もなく、そこでの公用語を何語とするかの問題に直面した。帝国の公用語たるドイツ語とハンガリー語は、依然として帝国領ではない同地に強制する訳にはいかなかった。また、オスマン帝国時代以来のオスマン・トルコ語を、公用語として使用し続けることも論外であった。そうした中で採用されていったのが、この「ボスニア語」を公用語とする政策である。公用語名は、統治開始当初の数ヶ月間に「クロアチア語」、次いで「地方語

16 Dževad A. Jahić, *Jezik bosanskih Muslimana* (Sarajevo: Biblioteka Ključanin, 1991), pp.25-26.



zemaljski jezik]、「ボスニア地方語 bosanski zemaljski jezik」とされた後、1883年より正式に「ボスニア語」とされることになる<sup>(17)</sup>。

1879年、公用語名に「ボスニア地方語」が採用された当時、同言語に関する文法書や語彙辞典、正書法辞典は皆無であった。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの住民は、「地方語」、「ボスニア地方語」との呼称も全く使用していなかった。一方、「ボスニア語」との呼称は、ムスリム（イスラム教徒）の間に一応存在していた。彼らは、自らの母語を指す際に、「ボスニア語」を、セルビア語、クロアチア語との呼称と共に併用していたのである。なお、彼らが主に用いた表記法は、クロアチア人と共通する、ラテン文字による語根式正書法（性や格による発音の変化を表記しない正書法）ではなく、セルビア人と共通する、キリル文字による音声式正書法であった<sup>(18)</sup>。ムスリムは、オスマン帝国時代、「アルハミヤド Alhamijado」と称される、母語をアラビア文字にて表記する伝統を長らく有していた。しかし、1865年、オスマン帝国が、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける公用語に、セルビアとクロアチアの文章語を言語名には未言及のまま採用すると、ムスリムの間にはセルビア人と共通の表記法が浸透したのであった<sup>(19)</sup>。

1882年、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ統治の責任者たるハプスブルク帝国政府大蔵大臣にカーライ Benjamin Kallay が着任すると、「ボスニア語」公用語化政策が本格的に着手される。カーライは、着任後間もなく、セルビア人、クロアチア人、ムスリムの宗教的あるいは民族的相違を超える概念として、「ボスニア民族 bosanska nacija」、「ボシュニャク人」を提唱し導入した<sup>(20)</sup>。そして、彼らの母語たる「ボスニア語」が、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける公用語であると位置づけた。同言語は、ムスリムの間に呼称としてこそ存在していたが、「ボスニア地方語」同様、文法書や語彙辞典、正書法辞典を欠いていた。そのため、カーライ率いる行政府（原語では「地方政府 zemaljska vlada」）は、翌年、音声式正書法の採用と、ラテン文字、キリル文字を併用する中でのラテン文字の優先的使用を決定した。また、言語委員会を設置し、文法書の作成や学校教科書に用いる語彙や表現の確定に取り組み始めた<sup>(21)</sup>。

こうした行政府による「ボスニア語」形成の試みは、1890年の『中等学校用ボスニア語文法』*Gramatika bosanskoga jezika za sredne škole* 出版へと至る。行政府は、同書の出版に合わせ、「ボスニア語」を学校教育における言語名として義務付ける決定を下した。当時、宗教別あるいは民族別に分かれていた中等学校では、同書は教科書としては問題なく使用されていたが、書名および言語名を巡って問題が多発した。なかでも一部のセルビア人学校

17 Tomislav Kraljačić, “Kalajeva jezička politika u Bosni i Hercegovini,” Miloš Okuka i Ljiljana Stančić, eds., *Književni jezik u Bosni i Hercegovini od Vuka Karadžića do kraja austrougarske vladavine* (München: Slavica-Verl. Kovač, 1991), pp.85-86.

18 Miloš Okuka, “Književnojezička situacija u Bosni i Hercegovini za vrijeme austrougarske vladavine,” *Isto*, p.53.

19 Miloš Okuka, “Usvajanje Vukova jezika i pravopisa u administrativno-pravnim spisima Turske administracije u Bosni i Hercegovini,” *Isto*, pp.48-49.

20 「ボスニア民族」を示す表現としては他に bosanski narod も存在しうるが、ここでは以下の文献の記述に従って bosanska nacija とした。Kraljačić, “Kalajeva jezička politika,” pp.85, 95; Jahić, *Jezik, nacija, nacionalizam*, p.102; Vera Kržišnik-Bukić, *Bosanski identitet između prošlosti i budućnosti* (Sarajevo: Bosanska Knjiga, 1997), p.29.

21 Okuka, “Književnojezička situacija,” pp.53-54.

は、行政府の決定に強く反発し、「ボスニア語」と記された部分を「セルビア語」に書き替えて使用する実力行使に出た。これに対し、行政府は、公共出版物を書き替えて使用することを禁ずる対抗措置を講じた。1893年に導入されたこの措置は、行政府側が折れる形で1897年に撤廃されるまで継続した<sup>(22)</sup>。

また、カーライによる「ボスニア語」公用語化政策は、それに平行した「ボスニア民族」創出政策も同様であるが、学校教育以外の場においても広範な支持を得ることが出来なかった。例えば、「ボスニア語」がボスニア・ヘルツェゴヴィナの公用語であった1883年から1907年の間に、同地で出版された諸雑誌のうち、自言語名を「ボスニア語」と記したのは、ムスリム系の政治誌『ボシュニャク』*Bošnjak* 以外には皆無であった<sup>(23)</sup>。カーライは、「ボスニア語」公用語化政策の失敗が明白化しつつあったにも拘わらず、1896年からの数年間、「ボスニア語」、「ボスニア民族」の独自性に関する言語学・民族学学会の開催を模索し続けた。しかし、1890年代、クロアチアにおいて音声式表記法が採用され、セルビア人とクロアチア人が文章語を事実上共有するようになる中で、この学会は結局未開催のままに終わった。「ボスニア語」は、1903年にカーライが死去して以降もボスニア・ヘルツェゴヴィナの公用語名であり続けたが、住民がその宗教や民族に応じた言語名を使用することはもはや自由になっていた。そして、こうした現実に追従する形で、1907年、公用語名は「ボスニア語」からセルビア・クロアチア語に改められたのであった<sup>(24)</sup>。

ハプスブルク帝国が委託統治下のボスニア・ヘルツェゴヴィナに導入した「ボスニア語」は、「ボスニア民族」、「ボシュニャク人」の概念と同様、実体の伴わぬものであった。もっとも、同言語の言語的規準が事後的に形成される中で、セルビア人、クロアチア人、ムスリムのいずれにも偏らぬよう確定されていった語彙、文法、正書法は、結果的にはセルビア・クロアチア語の標準化を一層促すことになった。1883年の「ボスニア語」における音声式正書法の採用は、1892年のクロアチアにおける同正書法の採用へとつながっていった。また、「ボスニア語」におけるラテン文字の優先的使用は、セルビア人とムスリムの間に、同文字を浸透させていった。さらに、『中等学校用ボスニア語文法』は、その後、『中等学校用セルビア・クロアチア語文法』*Gramatika srpskohrvatskoga jezika za sredne škole*と書名が変更され、内容には手が増えられることなく広範に使用されていった<sup>(25)</sup>。なお、カーライの推進した政策では、「ボシュニャク人」との民族名に対し言語名は「ボスニア語」で、両者は完全に対応している訳ではなかったが、当時、この問題が議論の的となることは無かった。公的生活空間において、宗教や民族に応じた諸名称の使用を大幅に制限されたボスニア・ヘルツェゴヴィナの住民にとっては、その自由を確保することの方がはるかに重要だったのである<sup>(26)</sup>。

22 Kraljačić, “Kalajeva jezička politika,” pp.90-91.

23 Ljiljana Stančić, “Jezička politika i nominacija jezika u Bosni i Hercegovini za vrijeme austrougarske vladavine,” Okuka et al., *Književni jezik u Bosni i Hercegovini*, pp.109-111.

24 Kraljačić, “Kalajeva jezička politika,” pp.93-95.

25 Miloš Okuka, “Gramatika srpskohrvatskog književnog jezika u Bosni i Hercegovini od Vuka Karadžića do kraja austrougarske vladavine,” Okuka et al., *Književni jezik u Bosni i Hercegovini*, pp.141-142.

26 セルビア人、クロアチア人による、「ボスニア語」に反対し、自民族名を冠した言語名の使用を主張する動きについては、Kraljačić, “Kalajeva jezička politika,” pp.90-92. に詳しい。また、セルビア人、クロアチ

## (2) 旧ユーゴ下における「ボスニア語」を巡る諸議論

第一次世界大戦の結果、ハプスブルク帝国は崩壊した。そして、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、1918年に建国された新国家「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(1929年にユーゴスラヴィア王国に改称)」の一部を形成することになった。この新国家下のボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、かつての「ボスニア語」、「ボスニア民族」、「ボシュニャク人」の概念が用いられることはなく、また、それらが住民の側から主張されることもなかった。ムスリムは、この新国家において、その民族性はおろか独自性さえ認められなかったが、それでも彼らはこれらの概念に依拠する動きすら見せなかった<sup>(27)</sup>。

第二次世界大戦後、戦時下で枢軸諸国に対する抵抗運動を組織したユーゴスラヴィア共産党の主導により、「ユーゴスラヴィア連邦人民共和国(1963年にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国に改称、以下旧ユーゴ)」が創設され、ボスニア・ヘルツェゴヴィナはその一構成共和国となる。旧ユーゴでは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人に加え、モンテネグロ人とマケドニア人の民族自決権が新たに承認されたが、ムスリムに関しては、当初その民族性は認められなかった。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、多数を占める民族を欠く中で、特定民族の自決権に基づいた他共和国とは異なり、地域的一体性に基づいて設置されることとなった。旧ユーゴでは、戦後暫くの間、「ユーゴスラヴィア人」、「ユーゴスラヴィア文化」という一元的な民族や文化の創出を目指す政策が推進された<sup>(28)</sup>。しかし、当時のボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいては、他共和国・自治州でも同様であるが、民族運動やその公用語を巡る問題が特に深刻化することはなかった。旧ユーゴ全土で、民族運動および言語問題が噴出するのは、同化主義的政策が放棄され、政治的経済的自由化が着手される1960年代後半以降である。「ボスニア語」、そしてボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現の標準形変異体への昇格を巡る主張は、1960年代末、同共和国のムスリムの民族性が事実上承認され(以下、民族としての彼らをムスリム人と記す)、かつ、クロアチアでクロアチア語を巡るナショナリズムが高揚する、という環境の中で開始される<sup>(29)</sup>。

---

ア人および一部ムスリムによる、「ボシュニャク人」を否定し、自民族名または宗教名(ムスリムの場合、ムスリムまたはムハマド人 Muhamedanci)の使用を強調する動きについては、Mustafa Imamović, “O historiji bošnjačkog pokušaja,” Atif Purivatra, Mustafa Imamović, Rusmir Mahmutćehajić, *Muslimani i Bošnjaštvo* (Sarajevo: Muslimanska Biblioteka, 1991), pp.41-55. に詳しい。なお、この両文献においては、「ヘルツェゴヴィナ出身者 Hercegovci は、なぜヘルツェゴヴィナ語 Hercegovčki ではなくボスニア語を学ばねばならないのか!」とか、「([『中等学校用ボスニア語文法』の導入によって) サラエヴォのギムナジウムでは「地方語」であるのに、師範学校や商業中等学校では「ボスニア語」を学ぶことになってしまった!」といった、言語名と民族名を巡る当時の非難の諸例が紹介されているが、民族名「ボシュニャク人」と言語名「ボスニア語」の非対応を巡る問題への言及はない。

27 Imamović, “O historiji bošnjačkog pokušaja,” pp.55-57.

28 J.レーヴェンハルト著、皆川修吾訳「旧ソ連邦、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィアにおける連邦主義とナショナリズム」木戸翁、皆川修吾編『講座スラブの世界⑤スラブの政治』弘文堂、1994年、176-178頁。

29 ここで、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現の標準形変異体への昇格を巡る議論を、「ボスニア語」を巡る議論と同列に扱っているのは、前者が後者に準ずる形で為されているからである。なお、セルビア・クロアチア語では、個別的な名称を以て標準形変異体が表現されるが(セルビア語=東部標準形変異体、クロアチア語=西部標準形変異体)、「ボスニア語」を巡っては、急進的な論者がこの語を用い、穏健的な論者が「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準形変異体」の語を用いる、といったような図式も存在していた。

「ボスニア語」、あるいはボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現の標準形変異体への昇格を巡る議論を展開したのは、専らムスリム人であった。この両議論に、内容面での大きな相違はなく、前者は、他民族による「固有言語なき民族」とのレッテルに対するムスリム人の自己主張として、また、後者は、言語の地域的な独自性をより強調する形で展開された。前者の議論では、ムスリム人のかつての自己認識が「ボシュニャク人」あるいは「ボスニア人」であり、その母語名には、「ボシュニャク語」あるいは「ボスニア語」との呼称が伝統的に用いられてきたことが主張された<sup>(30)</sup>。この議論では、ムスリム人の間に子音h[h]/[x]の使用が頻繁であり、それを表記に生かすべきであることが主張された。しかし、東部標準形変異体でv[v], j[j]と発音される子音が、西部標準形変異体ではしばしばhに置き換わる中(例: kuhati (西) - kuvati (東) (料理する))、具体的に挙げられた単語群は、西部標準形変異体のそれと異なるものではなかった<sup>(31)</sup>。また、後者の議論では、「ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準形変異体」固有の言語的特徴が挙げられることさえなかった。例えば、この議論の主たる論客であったイサコヴィッチ Alija Isaković は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現に固有の要素が欠如している点をあっさり認めつつも、「青と黄の混合色が青黄ではなく緑であるように」、両標準形変異体の混ざり合う同標準的表現も、標準形変異体としての地位を獲得すべき、との主張を展開していた<sup>(32)</sup>。

これらの議論は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、さほど支持を集めることはなかった。それゆえか、クロアチアにおけるクロアチア語を巡る民族運動とは異なり、当局による弾圧の対象とはならず、1970年代以降も公に主張されていった。なお、これらの議論では、ムスリム人の歴史的自己認識としての「ボシュニャク人」が肯定的に言及される一方、同名称の今日的使用は否定された。ムスリムの民族名は、「ムスリム人」で既に確定していたし、「ボシュニャク人」との名称自体が、ハプスブルク帝国時代の経験から、諸民族の民族意識と対立しかねない、超民族的あるいは一元的な概念を含んだものと見なされたのである<sup>(33)</sup>。また、ムスリム人の母語名としては、「ボスニア語」と共に「ボシュニャク語」が主張されているが、この両名称が一方に確定し切らない状況は、その後1990年代まで続くことになる。

### 3. 旧ユーゴの解体と「ボスニア語」の形成

#### (1) セルビア・クロアチア語か「ボスニア語」か

1980年に大統領ティトーが死去した旧ユーゴでは、1980年代後半に、コソヴォ問題および連邦の再編問題を巡るセルビアとスロヴェニアの対立が先鋭化し、国家の存続さえ危ぶまれるような状況に陥った。ボスニア・ヘルツェゴヴィナは、この両共和国のどちらの側にも与しなかったが、悪化の一途を辿る事態の打開に向け、積極的に動くこともしなかった。ま

30 Mak Dizdar, "Marginalije o jeziku i oko njega," *Život* XIX: 11-12 (1970), p.111; Muhamed Hadžijahić, *Od tradicije do identiteta: Geneza nacionalnog pitanja bosanskih Muslimana* (Sarajevo: Svjetlost, 1974), pp.24-25.

31 Dizdar, "Marginalije o jeziku i oko njega," pp.117-118.

32 Alija Isaković, "Varijante na popravnom ispitu," *Život* XIX:11-12 (1970), pp.69-71.

33 Sabrina P. Ramet, *Nationalism and Federalism in Yugoslavia, 1962-1991*, 2nd ed. (Bloomington and Indianapolis: Indianapolis University Press, 1992), p.181.

た、同共和国内のムスリム人は、連邦でのヘゲモニー掌握を目指すセルビア人の動きを警戒する一方で、多民族が共存する旧ユーゴそのものは支持し続けた。

1989年に、セルビアがコソヴォ自治州の自治権を事実上剥奪し、また、スロヴェニアが共和国憲法を修正し分離権の明記に踏み切ると、連邦解体の危険性は一挙に高まる。1990年1月には、ユーゴスラヴィア共産主義者同盟が共和国毎に分裂・解体する事態となり、各共和国では自由選挙を前に様々な政党が結成された。こうした政治環境の下で、ムスリム人の民族意識および言語意識は大きく揺れ動き始めた。ムスリム人の間では、母語名をセルビア・クロアチア語とし続けるべきか否か、自民族を旧ユーゴあつての存在と考えるべきか否か、等の問題で様々な議論が登場した。それらは、時として、新たに導入された複数政党制における政治的対立軸にさえなった。例えば、自由選挙を経て政権与党となったムスリム人民族主義政党の民主行動党 Stranka Demokratske Akcije (SDA)は、1990年春に結党して間もなく、党名や民族名、母語名を巡る内部論争に相次いで直面し、それらの問題を早急に処理していかなばならなくなった。

この、SDAが抱えた諸論争には、当時、ムスリム人の民族意識および言語意識がいかに揺れ動いていたかが、端的に表れているといえる。SDAは、結党に際しての党名選択の作業において、「ユーゴスラヴィア」の語を使用するか否かで早々に問題に直面した。同党は、ユーゴスラヴィア・ムスリム人党 Jugoslavenska Muslimanska Stranka (JMS)との党名をまず選択した。しかし、「ユーゴスラヴィア」との単語や概念にはもはや依拠すべきでない、との声が、党内のみならず隣接するクロアチア共和国の新政府からも上がったために、この党名は間もなく変更された<sup>(34)</sup>。SDAが次に直面したのは、ムスリム人との民族名をそのまま保ち続けるべきか、それとも「ボシュニャク人」とすべきか、の問題であった。この問題を巡る党内論争は、妥協点を見出せぬまま平行線を辿った。そして、ムスリム人との名称を支持するグループが論争に勝利するに及んで、「ボシュニャク人」との名称を支持するグループは離党に踏み切り、ムスリム・ボシュニャク人組織 Muslimansko Bošnjačka Organizacija (MBO)を結党した<sup>(35)</sup>。

SDAは、さらに、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ新政府の政権与党となって以降、ムスリム人の母語名をセルビア・クロアチア語とし続けるべきか否かの問題に対処することを試みた。同党は、「ボスニア語」との母語名を採用することに関心を持っていた。それゆえ、1991年春に実施された旧ユーゴの国勢調査において、ムスリム人に母語名を「ボスニア語」と申告するよう促すキャンペーンを大々的に展開し、結果、ムスリム人人口の約9割が母語を「ボスニア語」と申告した<sup>(36)</sup>。しかしながら、SDAは、これを理由とした「ボスニア語」の公用語化は敢えて追求しなかった。共和国人口の3割強を占めるセルビア人次第で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナが連邦に続いて解体しかねぬ情勢の中、多数派を占めるムスリム人の

34 Adil Zulfikarpašić, Milovan Đilas, Nadežda Gaće, *Bošnjak Adil Zulfikarpašić* (Zürich: Bošnjački Institut, 1996), p.138.

35 Adil Zulfikarpašić, Vlado Gotovac, Miko Tripalo, Ivo Banac, *Okovana Bosna* (Zürich: Bošnjački Institut, 1995), pp.29-30, 97. 続く1990年11月の自由選挙において、党名に民族名を冠さないSDAは、MBOへの対抗上、「ムスリム人の党 MUSLIMANSKA STRANKA」との選挙スローガンを選択した。Suad Arnautović, *Izbori u Bosni i Hercegovini '90: analiza izbornog procesa* (Sarajevo: Promocult, 1996), p.100.

36 Kržišnik-Bukić, *Bosanski identitet*, p.78.

立場から、同共和国の一体性を主張するSDAは、逆に、ムスリム人、セルビア人、クロアチア人に共通する公用語セルビア・クロアチア語の維持へと動いたのである<sup>(37)</sup>。こうして、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、セルビア・クロアチア語が公用語の位置を占め続けた。しかも、この公用語は、同共和国が民族紛争に突入して以降も、名目上とはいえ暫くの間存在し続けていった<sup>(38)</sup>。

ムスリム人の母語を巡る問題で、SDA以外に目を向けてみると、ムスリム人知識人や他のムスリム人政党は、ムスリム人、セルビア人、クロアチア人が共通の母語を有する事実を認めた上で、その名称を自由に選択する権利を主張していた。セルビア・クロアチア語に代わる名称としては、「ボスニア語」が主張されることが多かった。また、「ボシュニャク語」、「ボスニア・ムスリム文章語 *bosanskomuslimanski književni jezik*」などが主張されることもあった<sup>(39)</sup>。なお、h-音の積極的使用を唱える主張も再び出現した。一部では、このh-音やその他の言語的特徴に基づいて、ムスリム人固有の言語を形成しようとする動きさえ出始めた。しかし、この動きは、固有言語の全体像を提示することができぬままであった。

以上の如き、ムスリム人が、その民族名やセルビア・クロアチア語との公用語名をそのままに、母語名の選択肢としてボスニア語その他を主張する、という図式は、1993年春頃まで継続した。この図式は、1992年春に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立問題を巡ってクロアチア人と手を結んだムスリム人が、セルビア人との間で紛争に突入して以降も、大きくは変化しなかった。ムスリム人は、紛争当初、同盟者たるクロアチア人と母語および公用語を共有し続けることに肯定的であったし、また、セルビア人との戦闘に敗北を喫し続ける中で、アイデンティティの問題を云々する余裕もなかったからである。この図式が大きく変化する契機となったのは、1993年春の、ムスリム人・クロアチア人間の衝突激化である。これ以降、クロアチア人側の大々的な反イスラム宣伝に見舞われていったムスリム人は、間もなく、宗教名を冠さない民族名と、敵対する両民族名を冠さない母語名および公用語名の採用を検討し始める。続いて、同年7月には、米『フォーリン・アフェアーズ』*Foreign Affairs* 誌にハンチントン Samuel P. Huntington による論文「文明の衝突」“The Clash of Civilizations?” が掲載され、クロアチア人側、セルビア人側の反イスラム宣伝に呼応するが如き論調のこの論文は、紛争を巡る国際世論に少なからぬ影響を与えていく。そして、宗教名を直に用いた民族名が、他者から否定的に見られることが頻繁になったムスリム人は、他の民族名への変更を急ぐことになる<sup>(40)</sup>。

37 そこには、SDAのボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国議会における議席数が総議席数240中86で(35.85%)、憲法改正に必要な総議席数の3分の2以上に、単独では遠く及ばなかったとの事情も関係していた。なお、同議会におけるムスリム人議員の総数は99(41.25%)。Arnautović, *Izbori u Bosni i Hercegovini*, pp.108, 125.

38 *Ustav Republike Bosne i Hercegovine* (Prečišćeni tekst), Član 4. なお、新ユーゴの公用語は、1992年制定の憲法においてセルビア語、また、クロアチア共和国の公用語は、1991年制定の憲法においてクロアチア語とされており、両国においてセルビア・クロアチア語との公用語名が使用されなくなって以降も、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいてはこの公用語名が存続した事実は興味深い。*Ustav Savezne Republike Jugoslavije*, Odeljak I, Član 15; *Ustav Republike Hrvatske*, II. Temeljne odredbe, Članak 12.

39 Halilović, *Bosanski jezik*, pp.14-17; Zulfikarpašić et al., *Okovana Bosna*, p.103.

40 クロアチア人側による反イスラム宣伝の一例として、当時のクロアチア人勢力の指導者ボバン Mate Boban による次の言。「セルビア人とはキリスト教で兄弟関係にあるが、ムスリム人との間には何らの関係も存在しない。そればかりか、奴らは我々の母や姉妹に500年にも渡って暴行を加えてきた…」なお、ここでクロアチア人側の宣伝行為に「反ムスリム人」ではなく「反イスラム」との表現を用いたのは、彼らが

## (2) 「ボスニア語」の選択

ムスリム人の中で、既存の民族名、母語名および公用語名に代わりうる名称として浮上したのは、それまで採用が拒否あるいは見送られてきた、「ボシュニャク人」、「ボスニア語」であった。この両名称以外に、有力な案が浮上することはなく、検討の対象は当初より絞られていた。以前、ムスリム人の民族名を「ボシュニャク人」とすることに強硬に反対した政権与党SDAは、この問題に関する党の方針を転換させており、「ボスニア語」と併せた同名称の早期導入を声高に主張するようになっていた。このSDAの新方針は、他の政党や多くの知識人の賛同と協力を短期間のうちに獲得してゆき、「ボシュニャク人」、「ボスニア語」の名称は、1993年9月には早くも、一部での使用が開始された<sup>(41)</sup>。

ムスリム人が、「ボシュニャク人」、「ボスニア語」との名称の採用に動いた理由は、それらが伝統的に用いられてきた経緯を有し、かつ、民族の領土的基盤、母語および公用語の民族的地域的基盤をも示しうることにあった。ムスリム人にとり、「ボシュニャク人」との民族名は、宗教名を直に用いた従来の民族名に比較し、民族文化等を表現する上でも好都合であった<sup>(42)</sup>。また、「ボスニア語」との母語名および公用語名も、他民族からしばしば貼られてきた「固有言語なき民族」とのレッテルを払拭する意味でも有用であった。しかしながら、この両名称は、ハプスブルク帝国による導入の失敗や、付随する概念等の問題から、長らく否定的に扱われてきたものでもあった。それゆえ、ムスリム人は、「ボシュニャク人」、「ボ

---

ムスリム人との紛争を文明間・宗教間紛争と位置づけた上で、イスラム全体を糾弾するが如き言説を頻繁に用いたため。Miljenko Jergović, “Karadžićev brat u Krstu,” *Tjednik* 20, 11 July 1997, pp.14-17. 次に、ハンチントン「文明の衝突」中で、クロアチア人側、セルビア人側の反イスラム宣伝に呼応しているものとして例えば次の箇所。「バルカンにおけるこの境界線は、... これはたんなる文化・宗教的な区分を示す境界線ではなく、紛争と（平和）の境界線でもある。」「イスラム勢力はバルカン半島のセルビアにおける東方正教会信徒のみならず... カトリック教徒との間でも暴力的抗争を引き起こしている。」Samuel P. Huntington, “The Clash of Civilizations?,” *Foreign Affairs* 72:3 (1993), pp.22-49.; サミュエル・ハンチントン「文明の衝突」『中央公論』1993年8月号、349-374頁（なお、上記引用部分は356、360頁）。そして、この論文の発表以降、欧米においては、ムスリム人へのイスラム原理主義の浸透や、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの将来的なイスラム国家化を危険視する風潮が強まる。Ivo Banac, “Protuislamski sindrom i jedinstvena Bosna,” *Cijena Bosne: članci, izjave i javni nastupi, 1992-1995* (Sarajevo: Vijeće Kongresa bošnjačkih intelektualaca, 1996), pp.283-284. こうした状況にあって、ムスリム人の間では、民族名の変更を通じた問題の改善あるいは解決が訴えられていく。例えば、アタイッチ Ramo Atajić による論文の次の箇所。「『ボシュニャク人』としてならば、欧州の一員となることは（ムスリム人としてよりも）疑いなく容易であろう。何故ならば、宗教名と民族名が同一である限り、欧州は我々を受け入れることはできないであろうから。」Ramo Atajić, “Uloga i mjesto Bošnjaka u modernom svijetu,” *Bosna, Bošnjaštvo i Bosanski jezik: Zbornik referata sa Osnivačke skupštine Matice Bošnjaka* (Zürich: Matica Bošnjaka, 1993), p.50. なお、ムスリム人の民族名変更に関し、ベオグラード在住の「ボシュニャク人」歴史家ボイッチ Mehmedalija Bojić が述べるように、その直接の契機となったのは、クロアチア人側、セルビア人側による反イスラム宣伝であり、「文明の衝突」発表以降の欧米におけるムスリム人を危険視する風潮の強まりが、変更の過程を加速させたと思われるのが適当であろう。Perica Vučnić, “Bošnjačka kahva,” *Vreme* 281, 9 March 1996, pp.18-19.

41 Kržišnik-Bukić, *Bosanski identitet*, p.63. 両名称の使用開始は、ボスニア・ムスリム人賢人会議 Vijeće Kongresa bosanskomuslimanskih intelektualaca (VKBI) が主催し、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ政府要人や SDA 幹部も出席して行われた、第一回「ボシュニャク人」会議 Prvi bošnjački sabor において宣言された。なお、同宣言に伴い、VKBI は「ボシュニャク人」賢人会議 Vijeće Kongresa bošnjačkih intelektualaca と改称した（略称に変更は無し）。

42 例えば、「ムスリム文学 Muslimanski književnosti」のように、ムスリム人との民族名から民族文化の一端を表現しようとする場合、それが同時に全イスラム教徒のものであるが如き意味合いを持ってしまう問題があった。この点で、「ボシュニャク人」との民族名であれば、そうした問題は発生しない。Zulfikarpašić et al., *Bošnjak Adil Zulfikarpašić*, p.114.

スニア語」を採用するに際し、その否定的な側面やイメージを一掃すべく、新名称の正統性を訴える一連の議論を構築した。

この議論において、「ボシュニャク人」、「ボスニア語」は、民族および言語の歴史的名称であると位置づけられ、それらがかつてハプスブルク帝国下で導入された際にも、自発的に用いたのはムスリムのみであったことが主張された。また、この両名称が、20世紀に入って以降使用されなくなった経緯に関しては、当局による禁止のゆえに、ムスリムは他の名称を用いなければならなかったのだと説明された。そして、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立によって、ムスリム人は自ら民族名および言語名を選択する権利を手中に収めたこと、ゆえに、歴史的名称である「ボシュニャク人」、「ボスニア語」を再び導入するのであること、が主張された。

この議論では、民族名を「ボスニア人」、あるいは、言語名を「ボシュニャク語」とはしないことに関する理由づけも行われた。言語名を「ボシュニャク語」ではなく「ボスニア語」とする理由としては、1991年の国勢調査において、ムスリム人人口の大部分が母語名を「ボスニア語」と申告した事実、および、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、ムスリム人改め「ボシュニャク人」以外にも、同言語を母語と見なす他民族出身者が存在しうる可能性が挙げられた。また、民族名を「ボスニア人」ではなく「ボシュニャク人」とする理由としては、「ボスニア人」が、民族的出自を含意せず、専ら「ボスニア出身者」の意味で用いられるのに対し、「ボシュニャク人」には、民族的出自が地理的出自と共に含意されうることが挙げられた。なお、「ボシュニャク人」が、従来、超民族的概念を含む名称と見なされてきたことに関連して、ムスリム人がそれを独占的に使用することの正当化も試みられた。そこでは、民族意識を既に固めているセルビア人とクロアチア人が、「ボシュニャク人」との名称を用いる可能性は皆無に等しく、ムスリム人によるこの名称の使用が、両民族の民族意識を阻害することもないであろう、との論理が持ち出され、この論理に基づいて、ムスリム人が「ボシュニャク人」を問題なく使用できることが主張されていった<sup>(43)</sup>。

以上の議論は、「ボシュニャク人」、「ボスニア語」の名称にまつわる否定的要素をことごとく排した上で構築されており、無理が多々存在することは否めなかった。例えば、ムスリム(人)自身がこの両名称の採用を否定し続けてきたことは動かし難い事実であって、当局による禁止措置、との説明だけでは片付けられぬものであった<sup>(44)</sup>。また、「ボスニア語」採用の理由とされた1991年の国勢調査において、自民族名を「ボシュニャク人」と申告した者は僅か1285人だったのであるが(表2)、この数値の方が言及されることもなかった。ムスリム人が「ボシュニャク人」を独占的に使用することに関しても、この名称に超民族的概念が付随し続けるのか否かは結局明確にされぬままであった<sup>(45)</sup>。然るに、この議論を巡っ

43 Kržišnik-Bukić, *Bosanski identitet*, pp.85-90. この議論は、前述の第一回「ボシュニャク人」会議において、イサコヴィッチ VKBI 議長 (124頁にて言及したイサコヴィッチと同一人物) が行った演説の中で述べられたものであり、同会議全体の見解ともされたものである。

44 VKBI のイサコヴィッチ議長やブリヴァトラ委員 (119-120頁にて言及したブリヴァトラと同一人物) 自身、旧ユーゴ時代には、「ボシュニャク人」との民族名に強く反対する立場をとっていた。Zulfikarpašić et al., *Bošnjak Adil Zulfikarpašić*, p.105; Ramet, *Nationalism and Federalism in Yugoslavia*, p.181.

45 この問題に関しては、ムスリム人は「ボシュニャク人」との民族名を選択し使用する権利を有するが、しかし、この名称は超民族的な概念を含んでおり、それがムスリム人とイコールの関係になることはない、



て、両名称の採用を阻害するような疑問や反論が提出されることはなかった。そして、この両名称が、1994年春に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦憲法草案に明記され、公式に使用され始めたことは、冒頭においても述べたところである。

表2 ボスニア・ヘルツェゴヴィナの人口（1991年国勢調査、自己申告方式）

| 民族                     | 人口数(人)    | %      |
|------------------------|-----------|--------|
| ムスリム人(Muslimani)       | 1,902,956 | 43.48  |
| セルビア人(Srbi)            | 1,366,104 | 31.21  |
| クロアチア人(Hrvati)         | 760,852   | 17.38  |
| ユーゴスラヴィア人(Jugoslaveni) | 142,682   | 5.54   |
| ボスニア人(Bosanci)         | 10,763    | —      |
| ヘルツェゴヴィナ人(Hercegovci)  | 467       | —      |
| ボシュニャク人(Bošnjaci)      | 1,285     | —      |
| 総計                     | 4,377,033 | 100.00 |

(出典) Vera Kr Žižnik-Bukić, *Bosanski identitet između prošlosti i budućnosti* (Sarajevo: Bosanska Knjiga, 1997), p.44.

### (3) 「ボスニア語」の形成

さて、「ボシュニャク人」が用いる言語の名称に採用された「ボスニア語」であるが、彼らが使用する言語の実体は、それまでのセルビア・クロアチア語と何ら変わるものではなかった。言語名こそ変更されたものの、SDA政権の側がそれに合わせて新たな言語政策に着手した訳でもなかったため、「ボスニア語」では、セルビア・クロアチア語の語彙、文法、正書法がそのまま使用され続けたのである。そうした中、「ボスニア語」は、1995年年末のボスニア・ヘルツェゴヴィナ和平協定調印以降、協定関連文書作成言語として、英語、セルビア語、クロアチア語と肩を並べることになった。しかしながら、「ボスニア語」には、固有の文法書と正書法辞典が依然として欠如していたため、国際社会側が準備、作成した同言語版の文書は、キリル文字で記されたセルビア語版（イエ方言を用いた東部標準形変異体）を、ラテン文字に置き換えただけのものとなった<sup>(46)</sup>。

「ボシュニャク人」は、「ボスニア語」の全体像を提示することに困難を抱える一方、この言語の特徴や独自性を断片的には主張し続けていた。そして、1996年秋に、『ボスニア語正書法辞典』、『ボスニア語語彙正誤一覧』 *Gnijekdo lijepih riječi: pravilno-nepravilno na bosanskome jeziku*<sup>(47)</sup> の二書が出版されるに及んで、セルビア・クロアチア語と必ずしも同一でない「ボスニア語」の全体像が、漸く明らかになった。この両書では、まず、従来のボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現において併用されてきた、両標準形変異体間で異なる語彙、文法、正書法に関し、一方の用法への確定が可能な限り図られた。また、「ボシュニャ

との議論がボスニア・ヘルツェゴヴィナの内外で出た。この議論の論者達は、ムスリム人を即「ボシュニャク人」とするが如きSDAのイニシアティブに疑問を呈しており、宗教的帰属がイスラム教以外の者であっても、自己認識次第で彼らが「ボシュニャク人」たりうることを主張した。Zulfikarpašić et al., *Bošnjak Adil Zulfikarpašić*, pp.105-106; Ivo Banac, “Odanost bosanskoj državi,” *Cijena Bosne*, pp.111-113.

46 例えば、OSCEが、協定履行の一環たる選挙の際に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ市民向けに準備した選挙関連諸案内に、この実例を見ることができる。Izbori '96, September 1996.

47 Senahid Halilović, *Gnijekdo lijepih riječi: pravilno-nepravilno na bosanskome jeziku* (Sarajevo: Baština, 1996)

ク人」の間に使用が頻繁であるとされる h-音が、一部の語彙に実際に挿入された他、外来語彙の一部に対し、従来とは異なる正書法が採用された。以下では、これらの確定、変更部分の事例を、先の第1章で議論した両標準形変異体間の相違点を踏まえつつ提示してみる。

I. 複数の用法から一方の用法への確定（確定された用法に下線）

1. 文字

- ・ラテン文字（西）－キリル文字（東）→ラテン文字の優先的使用

2. 正書法

- ・未来時称の短縮形に関する表記法→（西）

例：Vidjet ću.（西）－Videću.（東）→Vidjet ću.

3. 文法

- ・助動詞と組む本動詞の活用→（東）

助動詞＋不定形（西）－助動詞＋接続詞 da＋活用形（東）

例：Moram ići.（西）－Moram da idem.（東）→Moram da idem.

4. 語彙

(1) 語彙の一部母音または子音の相違→（概ね西）

例：Jugoslavenski（西）－Jugoslovenski（東）→Jugoslavenski

točno（西）－tačno（東）→tačno

opći（西）－opšti（東）→opći

također（西）－takođe（東）→također

utjecaj（西）－uticaj（東）→utjecaj

(2) 接頭辞または接尾辞の相違→（未確定、併用の存続）

例：identificirati（西）－identifikovati（東）

formulirati（西）－formulisati（東）

suvremen（西）－savremen（東）

obrana（西）－odbrana（東）

profesorica（西）－profesorka（東）

(3) 語彙自体の相違→（概ね西）

例：povijest / historija（西）－istorija（東）→povijest / historija

inozemstvo（西）－inostranstvo（東）→inozemstvo

znanost（西）－nauka（東）→znanost / nauka

zrak（西）－vazduh（東）→zrak

val（西）－talas（東）→val

II. 一部語彙への h-音の挿入（括弧内は意味と従来の語彙）

kahva（コーヒー←kafa, kava）, lahak（軽く、容易に←lak）,

mehak（柔らかい←mek）, polahko（ゆっくり←polako）,

mahana（欠陥、欠点、早とちり←mana）, uvehnuti（衰える、萎む←uvenuti）,

truhnuti（腐る、腐食する←trunuti）, horiti se（響く、こだまする←oriti se）

III. 外来語彙の一部における正書法の変更（同上）

Kur'an（コーラン←Koran, Kuran）, tewba（懺悔←tevba, pokajanje）,

Muhammed (マホメット (イスラム教の開祖) ← Muhamed),  
 Allah (アラー (イスラム教の神) ← Alah) <sup>(48)</sup>

以上の確定、変更部分のうち、一部語彙への h- 音の挿入は、シュト方言において、語彙中の位置により脱落してしまった同音が、「ボシュニャク人」の間では一般に保持され続けている、との事実に基づいて為されている<sup>(49)</sup>。また、外来語彙、特にトルコ語およびアラビア語起源の語彙の一部における正書法の変更は、これらの語彙の表記を、元来の発音に近いものにする、との目的に基づくものである<sup>(50)</sup>。両標準形変異体が併用されてきた語彙、文法、正書法に関しては、西部標準形変異体のものを軸に確定が図られているが、そこには、東部標準形変異体の使用者が、敵対するセルビア人であることも関係しているものと思われる。

「ボスニア語」における、従来のセルビア・クロアチア語、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現からの確定や変更は以上の部分に限られており、言語の総体（文法構造、音韻組織、造語法、正書法、語彙など）からすれば、それらは微小な位置を占めるに過ぎない<sup>(51)</sup>。なお、一部語彙への h- 音の挿入に関しては、特に形容詞において、原形にのみ同音が挿入され、比較級および最上級には挿入されない結果、従来規則変化であったものが不規則変化になるケースが生じている。先に挙げた事例のうち、このケースが生じるのは、lahak (比較級、最上級はそれぞれ lakdši, najlakši)、mehak (同 mekši, najmekši)、polahko (同 polakše, najpolakše) である<sup>(52)</sup>。また、この新しい「ボスニア語」と、100年以上前にハプスブルク帝国下で導入された「ボスニア語」との相関性であるが、前者は後者を必ずしも踏襲していないようである。というのも、後者に特徴的である [d] 音の表記 gj (セルビア・クロアチア語では d) や存在を表す動詞 biti の否定形 nije+biti (同 ni+biti) は、前者において採用されておらず、逆に、前者に特徴的である一部語彙への h- 音の挿入も、後者においては行われていないからである<sup>(53)</sup>。

#### (4) 「ボスニア語」の現状

それでは、「ボスニア語」の特徴たるこれらの語彙、文法、正書法は、問題なく使用に移されているのであろうか。結論を先に述べてしまうならば、否である。「ボシュニャク人」支配地域で発行される新聞、雑誌のうち、それらが概ね遵守されているのは、与党 SDA 系の日刊紙ドネヴニ・アヴァズ *Dnevni Avaz* および週刊誌リリアン *Ljiljan* のみに過ぎない。その他の、比較的種類の多い独立系の日刊紙や週刊誌においては、セルビア・クロアチア語、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ標準的表現に含まれるが、「ボスニア語」からは逸脱する語彙

48 *Isto*, pp.49-121; Halilović, *Pravopis bosanskoga jezika*, pp.49, 121-122, 136, 146; Alija Isaković, *Rječnik bosanskoga jezika* (Sarajevo: Bosanska Knjiga, 1995), pp.387-390.

49 Isaković, *Rječnik bosanskoga jezika*, pp.382-386.

50 Halilović, *Pravopis bosanskoga jezika*, pp.136, 146.

51 この「ボスニア語」との比較で注目されるのが、旧ユーゴの解体に伴い、やはりセルビア・クロアチア語からの分離と差異化とが図られた、クロアチア語のケースである。クロアチア語では、新語の形成や古語の復活等を通じて、かなりドラスティックに語彙の置換が試みられた。詳しくは、三谷「現在のクロアチア語について」。

52 Halilović, *Pravopis bosanskoga jezika*, pp.310, 326, 417.

53 *Gramatika bosanskoga jezika za srednje škole* (Sarajevo: Nakladom zemaljske vlade za Bosnu i Hercegovinu, 1890) pp.5, 29-30, 93. なお、同書は、1994年に在独ムスリム人／「ボシュニャク人」団体により再版されており、ここではそれを使用した。

や正書法が使用され続けている<sup>(54)</sup>。以下では、NATOの新ユーゴ空爆とイスラム教の祝日バイラムBajramの様を大きく報じる、1999年3月30日付の独立系日刊紙オスロボジェーニエ *Oslobođenje* を材料に、その諸例を示してみる。

(以下、「ボスニア語」から逸脱する用法に下線。即する用法は斜体。なお、括弧内は「ボスニア語」での用法と訳。)

- a. Novi talas izbjeglica (→ val, 「難民の新たな波」(小見出し、一面))
- b. Radnici na čekanju dobiće novac  
(→ dobit će, 「(自宅) 待機労働者はお金を得るであろう」(大見出し、四面))
- c. Čelnici opštine Bosanska Krupa zatvaraju Arizonu 28. marta  
(→ općine, 「ボサンスカ・クルーパ自治体の上層部が、  
3月28日にアリゾナ・マーケットを閉鎖」(小見出し、十面))
- d. Selekcija naših zapadnih susjeda dosta lako prošla kvalifikacije  
(→ lahko, 「我が国の西の隣国の代表チームは、  
やすやすと予選を通過」(小見出し、十五面))
- e. Vidjećeš kako Srbin udara  
(→ Vidjet ćeš, 「セルビア人がどう襲撃するかを見よ」(小見出し、二十一面))
- f. Bosanski program za inostranstvo  
(→ inozemstvo, 「海外向け「ボスニア語」プログラム」(小見出し、最終面))
- g. Albanija i Crna Gora takođe su zapljusnute valom izbjeglica sa Kosova.  
(→ također, 「アルバニアとモンテネグロもまた、  
コソヴォからの難民の波に見舞われている。」(記事、一面))
- h. Od juče u Bijeljini nema predstavnika niti jedne međunarodne organizacije.  
(→ jučer, 「昨日より、ピエリナには、国際機関の代表者も、  
また、機関自体もない。」(記事、三面))
- i. Alijansa je pokrenula vazdušne udare na jugoslovenske snage na terenu.  
(→ zračne, jugoslavenske, 「連合軍(NATO)は、  
地上のユーゴスラヴィア軍に対する空爆を開始した。」(記事、十三面))
- j. U poslaničkoj misiji Muhameda a.s, koji je kao posljednji *Allahov* vjerovjesnik prenio poruku cijelom čovječanstvu,... (→ Muhammeda, 「アラーの最後の預言者として、人類全体に神託を伝えたマホメットの伝道団においては、...」(記事、九面))
- k. Sa *Kur'anom* osnažen je i smisao Musavom Tevratu i Isaovom Indžilu.  
(「コーランにより、モーゼの十戒とイサイアによる福音の思想は深められた。」(記事、九面))

以上の例のうち、d. は、h-音が挿入された「ボスニア語」を象徴する固有の語彙でさえ、必ずしも使用に移されていないことを意味するものである<sup>(55)</sup>。また、e. においては、一語

54 ここで、「ボスニア語」の使用状況確認のために用いた日刊紙および週刊誌は、ドネヴニ・アヴァズトリリアン以外では次の通り。(日刊紙) オスロボジェーニエ *Oslobođenje*、ヴェテヘルニエ・ノヴィネ *Večernje novine*、(週刊誌) スロボドナ・ボスナ *Slobodna Bosna*、スヴィエト *Svijet*。

55 h-音の挿入対象となった語彙のうち、メディアにおいて頻繁に使用される語はlak/lahak位のものである。従って、この語にh-音が挿入されているか否かが、「ボスニア語」の使用如何に関する指標になるともいえる。

の中で、「ボスニア語」の語彙と、非「ボスニア語」的な正書法が同時に用いられている。f. は、単発で掲載された他の例とは異なり、毎日掲載されるラジオ番組中の小見出しであるが、ここでも「ボスニア語」で確定された語彙は使用されていない。なお、一部外来語彙を巡る正書法に関しては、j. および k. に見られるように、他に比較すれば「ボスニア語」の用法が遵守されているようである。

では、何故、「ボスニア語」においては、以上に見られる如く、言語的特徴とされた部分が定着していないのであろうか。その理由として第一に考えられるのは、それらの部分の目立たなさや、特徴化が図られたタイミングの遅さなどの、いわゆる「ボスニア語」自体の問題であろう。が、ここでそれ以上に重要であると思われるのが、この言語を使用する側、させる側の問題である。まず、「ボスニア語」を使用させる側の SDA 政権であるが、「ボスニア語正書法辞典」が出版されて以降も、この言語の非セルビア・クロアチア語化を推進する動きや一貫した言語政策などを欠き続けている。それゆえ、「ボスニア語」で確定、変更された筈の文法や語彙は、政策的に使用が促されることがないのである。また、「ボスニア語」を使用する側の「ボシュニャク人」市民であるが、彼らの間に、独自言語の形成を求めるコンセンサスがあるとはいえず、かつ、「ボスニア語」の語彙や正書法を積極的に使用しなければならない、といった雰囲気が存在する訳でもない<sup>56)</sup>。これでは、それらの語彙や正書法の使用が定着しないのも半ば当然である。しかも、「ボスニア語正書法辞典」の出版以来続くこの現状に変化の兆しはなく、従って、近い将来に、「ボスニア語」の非セルビア・クロアチア語化が大きく進展することもあるとも思われないのである。

なお、この「ボスニア語」に関しては、以上の問題に加えて、その言語名が他者から正しく認識されない問題が生じていることにも言及しておかねばなるまい。この問題は、「ボスニア語」、「ボシュニャク人」の他言語への訳出においてしばしば発生しているものであり、要は、言語名が民族名に沿って「ボシュニャク語」とされてしまっているケースである。例えば、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの公用語に関し、1995 年年末に調印された和平協定の英語版では *bosnian* であるが、1994 年春に調印された連邦憲法案の英語版には *bosniac* と記されてしまっている<sup>57)</sup>。また、新ユーゴで出版された文献の中には、「ボシュニャク人」以外が「ボスニア語」を母語とする可能性を否定するための意図的行為かもしれないが、同言語が *bosanski* ではなく *bošnjački* と記されているケースが少なからずある<sup>58)</sup>。同様に、逆のケース、即ち、「ボシュニャク人」の訳出を巡る混乱も当然起こっており、例えば、この民

56 これは、筆者が1996年の夏から秋にかけてサラエヴォに数ヶ月滞在した際の経験からであるが、『ボスニア語正書法辞典』の出版に対する同市中心部(旧市街地域)の人々の反応を見る限りでは、「ボスニア語」との名称を積極的に受容はしても、h-音を日常的に使用されているもの、あるいは、使用しなければならないもの、とは見なししていないようであった(ここに述べた、筆者が直接に反応を見聞いた人々は、学者、官僚、国際機関従事者、ジャーナリストなどの、いわゆるインテリ層であり、「ボスニア語」を推進するグループとは階層的に同じであるといえよう)。なお、同市中心部の人口構成は、旧来からの住民が多数を占め、かつ、(未だに)多民族であるのだが、他方、農村地域からの「ボシュニャク人」難民の多い、同市周辺部の人々の反応は、残念ながら未見である。

57 *The Dayton Peace Accords: General Framework Agreement for Peace in Bosnia and Herzegovina*, p.2; *Proposed Constitution of the Federation of Bosnia and Herzegovina*, I. Establishment of the Federation, Article 6.

58 このケースが見られるのは、例えば次の文献。Radovanović et al., *Srpski jezik na kraju veka*; Miloš Kovačević, "Novi početak ili raskršenje srbistike," *Srbistika* 1:1 (1998), pp.77-89.

族を指すべく用いられる英単語は、筆者が知りうる限り、Bosniacs、Bosniaks、Bosnians、Bosnian Muslims の四者にも上ってしまっている<sup>(59)</sup>。

## おわりに

以上、新国家ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、1990年代半ばに登場した新言語「ボスニア語」に関し、それがいかなる言語的、歴史のおよび政治的背景から形成されたのか、また、それがいかに使用に移されているのかを考察してみた。「ボスニア語」は、紛争下、宗教名や他民族名を冠さない民族名、言語名を模索したムスリム人が、「ボシュニャク人」との民族名とともに採用したものであった。そして、この言語の実体は、従来のセルビア・クロアチア語に若干の確定や変更が加えられる形で事後的に形成されたが、使用にはおよそ移されていないとのことであった。

冒頭にて提起した問題との関連でいえば、まず、「ボスニア語」が、セルビア・クロアチア語に加わった新呼称の域を出るものでないことは、疑う余地がないであろう。「ボスニア語」の言語実体とされるものの中で、従来のセルビア・クロアチア語の用法と明らかに異なっているのは、h-音が挿入された一部語彙のみだからである。かつ、「ボスニア語」との言語名を掲げながら、その言語実体を使用しないケースが往々存在し、それが問題視されることもないからである。また、名称的に対応していない、民族名「ボシュニャク人」と言語名「ボスニア語」が選択されたのは、変更に際し、対応関係よりも、この両名称が持つ意味や伝統性の方が重視されたことによる。しかも、仮に、対応関係ゆえに民族名を「ボスニア人」あるいは言語名を「ボシュニャク語」とした場合、そこには、概念上、便宜上の問題が発生してしまうからである。

「ボスニア語」は、一個の言語として形成されるには、そもそも条件的に恵まれていなかった。「ボスニア語」が依拠すべきボスニア・ヘルツェゴヴィナの方言は、セルビア・クロアチア語の基体とされたものでもあり、そこから従来の標準形と異なる要素を抽出することは容易ではなかった。その上、この方言には民族的な偏差がほとんどなく、そこからムスリム人／「ボシュニャク人」のみに特徴的な要素を抽出することは非常に困難であった<sup>(60)</sup>。この点で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいては、他の公用語であるセルビア語とクロアチア語も「ボスニア語」と共通の言語的背景を有するのであるが、この両言語の現状や、それらと「ボスニア語」との比較に関しては、別の機会に論じることとしたい。

59 これらの単語が見られた文献・資料は、単語別に次の通り。

Bosniacs : *The Dayton Peace Accords*, Annex 4: Constitution.

Bosniaks : Susan L. Woodward, *Balkan Tragedy: Chaos and Dissolution after the Cold War* (Washington: The Brookings Institution, 1995), p.315.

Bosnians : Zoran Lutovac & N.D.A. Arvanites, "Politics and Geopolitics of the Raška Region," *Eurobalkans* 25 (1996), pp.33-34.

Bosnian Muslims : Isaković, *Rječnik bosanskoga jezika*, pp.X-XXVII.

60 旧ユーゴ時代に為された、この抽出の試みとして、Selim Čerić, *Muslimani srpskohrvatskog jezika* (Sarajevo: Svjetlost, 1968); Jahić, *Jezik bosanskih Muslimana*.

## The Creation of Bosnian Language

SAITO Atsushi

During the war in Bosnia-Herzegovina in 1994, Muslims there decided to give a new name to the language which they spoke. This decision was taken together with the change of their ethnic name. “Bosnian” (Bosanski) replaced Serbo-Croatian as the official name of their language, while “Bosniacs” (Bošnjaci) was adopted as their new national name. Bosniacs continued to use the linguistic elements of Serbo-Croatian even after its nominal change. At that time, it was uncertain whether they would seek to create purely Bosnian linguistic elements.

The first orthographical textbook of Bosnian was published in the autumn of 1996. Some minor changes were added to the linguistic elements of Serbo-Croatian in this textbook. Despite its publication, some questions about Bosnian remain unclear. One is whether Bosnian is to be considered a distinct language or it is no more than a new name of Serbo-Croatian. Another is why the new language name does not correspond to the new national name. In this paper I have tried to answer these questions by examining the linguistic, historical, and political background of Bosnian. The paper also reconsiders the role of language in ethnic identity because the case of Bosnian is a rare one: a nation based on religion has tried to create its own language later.

The first chapter indicates the linguistic features of Serbo-Croatian in Bosnia-Herzegovina, which is the base of Bosnian. Serbo-Croatian was established as the common language of the region’s Serbs, Croats, Muslims, and Montenegrins in the late 19th century. It is a single, standard language with two major variants (the western or Croatian and eastern or Serbian variants) and two varieties (that spoken in Bosnia-Herzegovina and that in Montenegro). Standard Serbo-Croatian is based on the dialect spoken extensively in eastern Bosnia-Herzegovina and western Serbia. The variants contain many words exclusive to themselves, while the varieties blend elements of both variants.

In Bosnia-Herzegovina, Serbs, Croats, and Muslims speak the same Bosnian language variety. It is almost impossible to distinguish a Serb from a Croat from a Muslim by their speech alone, because the ethnic distribution was very mixed and their dialects vary geographically, not ethnically. In the Bosnian language variety it is acceptable/common to use and mix elements of both variants.

The second chapter reviews the recent history of arguments and policies about Bosnian language. Despite the above language situation, certain Muslim linguists argued that Bosnian should be recognized as a distinct language in the 1970’s. The authorities in the late 19th century, too, once attempted to create a Bosnian language.

Bosnian was chosen for the name of the official language in Bosnia-Herzegovina soon after the start of the Habsburgs’ rule there. Benjamin Kallay, who served as governor of Bosnia-Herzegovina from 1882 to 1903, believed the necessity of a separate Bosnian national identity among the population and therefore decided to create a Bosniac people and a Bosnian language. At that time, Serbs called their mother tongue Serbian and used a Cyrillic-phonetic alphabet, Croats called it Croatian and used a Latin-etymological alphabet, and Muslims called it Bosnian or Serbian or Croatian and used an Arabic or a Cyrillic-phonetic alphabet. In order to standardize their common spoken language as Bosnian, Kallay and his government decided to adopt a Latin-phonetic alphabet and established the *Committee for the Bosnian Language*.

The work of this committee resulted in the publication of a *Grammar of Bosnian Language for High Schools* in 1890. Though this textbook was widely used, many problems related to the name of the language arose. Serbs and Croats were strongly against the name Bosnian, and they refused to call their language as such not only in high schools but also in public life.

Some Muslim intellectuals positively accepted this name, but most of the Muslim population were not like them. Thus, Kallay's attempt proved unsuccessful in its early stage, and no more important measures were taken after that. In 1907, 4 years since Kallay's death, the official language in Bosnia-Herzegovina was renamed from Bosnian to Serbo-Croatian.

The Kingdom of Yugoslavia founded in 1918 did not recognize neither nationality nor particularity of Muslims in Bosnia-Herzegovina. In spite of such situation, they never relied on the former unsuccessful names of "Bosniacs" and "Bosnian". They continued to keep a distance from these names after World War II in Socialist Yugoslavia for decades. The name "Bosnian language" was revived in the early 1970's, this being catalyzed by the proclamation of a Muslim nationality and by various national movements in other federal units.

At this time, Bosnian was perceived particularly as the language of Muslims. Though some Muslim linguists insisted that it needed to put back the voiced *h* wherever it was suspected one might have existed, they could not present any good examples. Others even admitted that it would be difficult for Bosnian to have its own elements. They did not insist on the use of the name Bosniac nation along with Bosnian, because they regarded it as a negation of the Muslim national consciousness.

The third chapter surveys the change of national and linguistic identity of Muslims in the process of disintegration in ex-Yugoslavia, and examines how Bosnian has been created and used. Influenced by the increasingly fluid politics in the late 1980's, the national and linguistic identity of Muslims started to be shaken. Many questions related to their nationality and language were raised, especially after the collapse of the League of Communists of Yugoslavia in the beginning of 1990. Muslims themselves once decided to keep the existing names of "Muslim nation" and "Serbo-Croatian language" after several controversies. But the outbreak of war in Bosnia-Herzegovina brought about another situation.

During the war in 1993, two events occurred which later made Muslims change their national and language names. One was the start of the conflict with Croats, their former ally against Serbs. This new conflict made Muslims seek a language name other than Serbo-Croatian. The other was the publication of a paper named "The Clash of Civilizations?" by Huntington. It strengthened the anti-Islam tendency among Westerners, and their strong bias forced Muslims to seek another national name.

In the next year, Muslims dared to adopt the new names of Bosniacs and Bosnian, which they had long avoided using. These names were adopted without any strong opposition despite their negative past and implications. Some pretexts were formed for the use of these names by Muslim intellectuals. They explained that the Bosniac national name, which implied a supranational concept, could be used by Muslims exclusively because Serbs and Croats would not identify themselves as such any more. They also insisted that the language had to be Bosnian, not Bosniac, because it would be regarded as a mother tongue not only by Bosniacs but also by members of other nations in Bosnia-Herzegovina.

Until the publication of its first orthographical textbook in 1996, Bosnian was *de facto* a new name added to Serbo-Croatian. But it became clear that Muslims, now Bosniacs, wanted Bosnian to be exclusively their language in this textbook. New elements were invented in it, through changing some orthographic rules, or putting back the voiced *h* wherever it was suspected one might have existed in the distant past.

Though Bosnian was created in such way, its new elements are not always used. Interventions in the language were too late and subtle. In addition, the authorities have not formed a concrete language policy, and the Bosniac population is not eager to use them. Considering these conditions, it is impossible to regard Bosnian as a distinct language. It is also hard to foresee that Bosnian will become more distinct in the near future, because there are no signs of change in these conditions for the time being.



It was not easy for Bosnian to be created from the beginning. Since standard Serbo-Croatian is based on the dialect in Bosnia-Herzegovina, Bosnian could not pick up enough peculiar elements from this dialect. Furthermore, Bosnian had great difficulty in finding elements exclusive to Muslims/Bosniacs in this dialect which is shared by the three nations.